静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第24集

中桁・中ノ坪遺跡

富士市

平成22・24年度（都）本市場大渕線　社会資本整備総合交付金事業（街路）工事
（道路新設工）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

静岡県埋蔵文化財センター

序

静岡県埋蔵文化財センター調査報告第24集として『中桁・中ノ坪遺跡』をここに刊行します。

中桁・中ノ坪遺跡は静岡県富士市伝法に所在し、富士山南麓の大渕扇状地上に立地します。当遺跡周辺には、静岡県東部を代表する大規模遺跡である東平遺跡が所在しています。また、県指定史跡・伊勢塚古墳や秀逸な副葬品が出土した東平１号墳など、学史上著名な遺跡が数多く分布する地域でもあります。

今回の中桁・中ノ坪遺跡の調査では竪穴建物跡が密集して検出され、近隣の東平遺跡を中核とした大渕扇状地上に展開する古代集落の様相を追加する資料を得ました。また、出土遺物には静岡県西部で使用された土器などが確認され、古代の活発な交流の実態をうかがうことができます。今後は周辺遺跡の調査成果と併せて、精緻な分析が必要となりますが、本書により日本古代史研究が一層進展することを期待します。それとともに、本書が研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、現地調査及び資料整理並びに本書の作成にあたり、静岡県富士土木事務所ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2013年1月

静岡県埋蔵文化財センター所長
勝　田　順　也

例　　言

1　本書は、静岡県富士市伝法に所在する中桁・中ノ坪遺跡の発掘調査報告書である。
　中桁・中ノ坪遺跡　　静岡県富士市伝法1110-8ほか
2　調査は、平成22・24年度(都)本市場大渕線　社会資本整備総合交付金事業(街路)工事(道路新設工)に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。
3　中桁・中ノ坪遺跡の現地調査及び資料整理期間は、以下のとおりである。
　現地調査　(第1期)平成23年6月～平成23年7月　対象面積　300㎡
　　(第2期)平成23年11月～平成24年2月　対象面積 1,519㎡
　資料整理　平成24年5月～平成25年1月
4　調査体制は、以下のとおりである。
　平成23年度(現地調査)
　所長　勝田順也　　次長兼総務課長　八木利眞　　調査課長　中鉢賢治
　主幹兼事業係長　村松弘文　　総務係長　　瀧　みやこ
　調査第二係長　　溝口彰啓　　第二係主査　丸杉俊一郎
　平成24年度(資料整理)
　所長　勝田順也　　次長兼総務課長　八木利眞　　調査課長　中鉢賢治
　主幹兼事業係長　前田雅人　　総務係長　　瀧　みやこ
　調査第二係長　　溝口彰啓　　第二係主査　丸杉俊一郎
5　本書の執筆は、丸杉俊一郎が行った。
6　本書の編集は、静岡県埋蔵文化財センターが行った。
7　外部委託については、下記のとおりである。
　掘削等業務委託　　セリザワ建設株式会社
　遺跡測量等業務委託　　株式会社フジヤマ
　整理作業・保存処理業務委託　株式会社パソナ
8　発掘調査では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる(五十音順・敬称略)。
　静岡県富士土木事務所　富士市教育委員会　富士市上田端地区自治会
　佐藤祐樹　藤村　翔
9　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

1　本書で用いる座標値は、世界測地系に基づいている。
2　遺構の略記号は以下のとおりである。
　SH：竪穴建物　　SK：土坑　　SP：小穴
3　遺物番号は遺物の種別にかかわりなく、それぞれ連番を付した。
4　本書で報告する土器の断面と種別の関係は以下のとおりとする。
　□ 土師器　■ 須恵器　▒ 施釉陶器

中桁・中ノ坪遺跡

目　　次

序
例　　言
凡　　例

第１章　序　　論 …… 1
　第１節　調査経緯 …… 1
　第２節　調査方法 …… 2

第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
　第３節　既往の調査 …… 6

第３章　調査成果 …… 7
　第１節　検出遺構 …… 7
　第２節　出土遺物 …… 15

第４章　総　　括 …… 19

図　　版

挿　図　目　次

第１図　中桁・中ノ坪遺跡の位置 …… 1
第２図　グリッド配置図 …… 2
第３図　中桁・中ノ坪遺跡の立地環境 …… 3
第４図　中桁・中ノ坪遺跡周辺の遺跡分布 …… 5
第５図　中桁・中ノ坪遺跡の調査状況 …… 6
第６図　調査地の詳細 …… 7
第７図　中桁・中ノ坪遺跡の基本層位 …… 8
第８図　検出遺構 …… 9
第９図　SH01 ～ 03実測図 …… 10
第10図　SH04・06・09実測図 …… 11
第11図　SH05実測図 …… 12
第12図　SH07実測図 …… 13
第13図　SH08実測図 …… 14
第14図　竪穴建物出土遺物（１）…… 15
第15図　竪穴建物出土遺物（２）…… 16
第16図　包含層出土遺物 …… 17
第17図　墨書土器 …… 18
第18図　中桁・中ノ坪遺跡の様相 …… 19
第19図　東平遺跡の様相 …… 20
第20図　８世紀の様相 …… 21

表　目　次

第１表　中桁・中ノ坪遺跡における調査一覧 …… 6
第２表　出土遺物観察表 …… 23

図　版　目　次

図版１　１　中桁・中ノ坪遺跡と富士山（南西から）
　　２　調査地区遠景（北東から）
図版２　１　１区全景（北東から）
　　２　２区北半全景（北東から）
図版３　１　２区南半全景（１）（北東から）
　　２　２区南半全景（２）（北東から）
図版４　１　SH01（南から）
　　２　SH02（南から）
　　３　SH03（南から）
図版５　１　SH05（南東から）
　　２　SH05　遺検出状況（南東から）
　　３　SH06（南東から）
図版６　１　SH07（南東から）
　　２　SH08（南から）
　　３　SH08　遺検出状況（南西から）
図版７　中桁・中ノ坪遺跡主要出土遺物
図版８　竪穴建物主要出土遺物
図版９　１　SH05出土遺物（１）
　　２　SH05出土遺物（２）
図版10　１　SH07出土遺物
　　２　SH07・08出土遺物
図版11　包含層出土遺物
図版12　墨書土器（１）
図版13　墨書土器（２）
図版14　１　砥　石
　　２　鉄製品

第１章　序　論

第１節　調査経緯

中桁・中ノ坪遺跡は、富士山南麓の潤井川左岸・静岡県富士市伝法に所在する遺跡である。

富士市中心地付近を通る県道174号富士停車場伝法線は、幅員が狭小であることに加え一方通行箇所等もあるため、交通渋滞が著しく発生していた。また、歩道が存在していないため、歩行者の通行には危険な状態であった。このような交通障害を解消する目的で計画されたのが、岳南広域都市計画道路本市場大渕線街路事業である。この新道路路線は、富士市本市場の県道396号富士由比線(旧国道１号線)との交差箇所を起点とし、富士市大渕の岳南北部幹線を終点とする都市計画道路である。本路線の整備により交通渋滞の緩和・歩行者の安全確保が期待されるだけでなく、東名高速道路・新東名高速道路・西富士道路へのアクセス道路としても重要な役割を担うものである。

中桁・中ノ坪遺跡周辺では、東名高速道路富士インターチェンジ建設を契機として、富士市教育委員会により継続的に発掘調査が実施されている。特に東平遺跡は、８世紀から９世紀前半を主体とする時期に営まれた大規模集落であることが確認され、「布自」と記された墨書土器が出土したことから富士郡家との関連が注目されている。東平遺跡の他にも沢東Ａ遺跡、中桁・中ノ坪遺跡、舟久保遺跡等において発掘調査が実施され、古代の大渕扇状地に展開した遺跡群の新たな知見が集積されてきている。

今回報告する中桁・中ノ坪遺跡は、周知されていた遺跡範囲の近接地に都市計画道路本市場大渕線が計画された。これを受け、2005年11月より静岡県教育委員会が断続的に確認調査を実施した結果、周知の遺跡範囲よりも東側に拡大していたことが確認された。そのため、静岡県教育委員会は静岡県富士土木事務所と協議し、記録保存を目的とした本発掘調査を静岡県埋蔵文化財センターが実施することとなった。現地調査は２期に分かれ、１期は2011年６月８日から７月27日、２期は2011年11月22日から2012年２月13日にかけて実施した。調査面積は1期300㎡・２期1,519㎡である。

第１図　中桁・中ノ坪遺跡の位置

第２節　調査方法

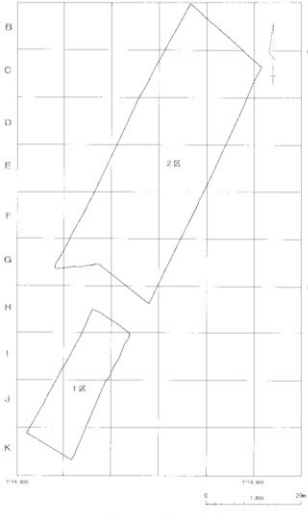
調査地区の設定　今回報告する中桁・中ノ坪遺跡の発掘調査は、新規道路建設という性格上、細長い調査区となっている。調査は、排土置き場の確保や道路建設の工程などから１区と２区に、さらに２区は北・南半に分割して調査を行った。

なお、１区西側は確認調査以前に掘削工事が及んでいたため、調査対象範囲から除外している。

グリッドの設定　調査対象地を正確かつ客観的に表示し、記録するため世界測地系に準拠して基準点を設置した。また、これを元に調査区全体に10m 四方のグリッドを設定した。グリッド名称は北東を基準に、南北方向にアルファベット･東西方向に数字をあてはめ、北東角のポイントに従って呼称した。なお、Ａ１ポイントの座標は（Ｘ :91,780.00、Ｙ :14,910.00）である。

表土除去　調査地区全域にわたって表土及び耕作土が60cm 程堆積していたため、重機（バックホウ）を用いて表土を除去した。重機のバケットには平爪を着装し、慎重に掘削を行った。今回の調査では明確な遺物包含層を確認することができず、遺構検出が可能な黒褐色砂礫層にいたる。そのため、遺構検出面にできるだけ近い部分まで重機による掘削を行っている。

遺構の確認・精査　遺構の検出は主に鋤簾を使用した。平坦面における遺構の識別は、各層相が非常に類似しているため困難であった。検出した遺構は、両刃鎌・移植ごて等を使って掘り下げを行った。遺物の出土状況が良好な遺構においては、出土状況図を作成して取り上げを行った。



第２図　グリッド配置図

記録作成　遺構図面の作成は、遺構の切り合いや検出面の土質により崩壊の可能性を考慮して主にトータルステーションを使用し、空中写真測量も実施した。原則として、全体図は1/20図面を作成し、併せて1/100図も作成した。遺物出土状況図は1/10図を基本とした。

写真撮影は主に６×７判を用い、フィルムにはモノクロ・カラーリバーサルの双方を使用した。調査工程記録写真などは、35㎜判カメラで対応した。撮影にはローリングタワーなどを使用し、全景写真ではラジコンヘリコプターも利用した。

資料整理・報告書作成　平成24年５月から静岡市駿河区緑が丘町に所在する静岡県埋蔵文化財センター中原事務所において接合・復原・実測・版組・トレース・原稿執筆などの報告書作成作業を進めた。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

中桁・中ノ坪遺跡が所在する静岡県富士市は、静岡県東部・富士山の南麓に位置している。遺跡は、JR 東海道本線富士駅から北に25kmほどの地点に相当し、宅地と工場が混在している都市環境である。

この地域は、富士山南麓の大渕扇状地と富士川によって形成された加島平野の北端が接する地域である。大渕扇状地は、約14,000年前に開始した新富士火山の旧期活動期に伴う大渕溶岩流が古富士泥流上部を覆い、その後に流下した曽比奈溶岩流Ⅰや火山灰・火山礫などが厚く堆積して形成された地形である。扇状地堆積物は火山砂礫層で、硬く締まっており粘性はほとんどない。砂岩と混同するような硬く締まる材質もあり、これを切り出して竪穴建物の竈の芯材として利用することが本遺跡でも認められる。

中桁・中ノ坪遺跡の南側には潤井川が、東側には伝法沢川が流れている。伝法沢川は幅員は狭いが深い谷地形を形成し、東側に所在する東平遺跡とは自然地形により明確に区分される。

第２節　歴史的環境

縄文・弥生時代　潤井川流域における縄文時代の遺跡は、念信園遺跡・天間沢遺跡などが確認されている。念信園遺跡は早期・中～晩期に時期的中心があり、遺跡が所在する岩本山丘陵周辺には早期の万野遺跡、中期後半の羽渕平遺跡や奥の原Ａ遺跡・高徳坊遺跡などが知られる。天間沢遺跡では中期の住居跡や配石遺構などが確認されている。この他、中桁・中ノ坪遺跡東側では、中・後期の宇東川遺跡や後期の中島遺跡・斉藤上遺跡などが滝川・松原川周辺で確認されている。

第３図　中桁・中ノ坪遺跡の立地環境

弥生時代においては、浮島ヶ原低地西側に位置する沖田遺跡で中期の遺物が出土しているが、後期前半頃になり宮添遺跡・平椎遺跡・的場遺跡など浮島ヶ原低地を望む丘陵先端部に多くの集落が展開される。これは東駿河地域全体における動向であり、次の古墳時代への胎動を示す画期と捉えられる。一方、大渕扇状地上の各遺跡では、調査資料が少なく実態は明らかではない。

古墳時代　古墳時代前期になっても大渕扇状地での人為的活動は低調なまま推移するが、中桁・中ノ坪遺跡で５世紀後葉頃の竪穴建物跡が検出され、東平遺跡でも同時期の竪穴建物跡が確認されており、５世紀代になり本格的に集落を形成し始める。また、大渕扇状地西側に立地する沢東Ａ遺跡でも中期以降、集落が大きく展開していく。各遺跡はその後も古墳時代を通じて継続していくが、その成立はいずれも大渕扇状地の扇端部であることが注目される。このような地域は水資源の確保が容易という立地上の利点とともに、鉄製農工具使用の拡大・竈や須恵器の導入等の技術革新・生活様式の変化を契機に潤井川流域へ進出したものと推察される。

大渕扇状地では集落の形成とともに、６世紀以降東平遺跡及びその周辺で古墳の造営が活発となり、東駿河地域において特筆すべき内容の副葬品が確認されている。当地域の出現期の古墳は６世紀初頭に直径54mの伊勢塚古墳が造営され、７・８世紀にかけて東平遺跡の西範囲内に伝法１古墳群・東範囲内に伝法２古墳群と伝法３古墳群、北側には土手内・中原古墳群が形成される。

伝法１古墳群は７～８世紀代を主体に築造され、古墳群の最北端に位置する西平１号墳からは蕨手刀・鈴帯金具等が出土し、８世紀第１四半期頃の築造と位置付けられている。伝法２古墳群に属する東平１号墳は７世紀前葉頃の築造と推定されており、副葬品には丁字形利器・金銅製杓子形壺鐘・金銅製辻金具等が出土している。伝法３古墳群は４基存在したことは確認されているものの、すべて消滅しており、詳細は判然としないが７世紀末葉～８世紀中葉頃に造営されたものと考えられている。

土手内・中原古墳群は約30基程度の古墳から形成されているとみられ、６世紀後半の横沢古墳からは金銅製鈴が出土している。また、同時期に築造され７世紀初頭頃まで追葬が行われたと指摘されている中原４号墳からは、鉄鉗・針・鋤鍬先・鑿・鉋など豊富な鉄製農工具が出土している。また、８世紀前半頃の中原１号墳からは、勾玉・管玉・棗玉・小玉が多量に出土している。

奈良・平安時代　『和名類聚抄』によると中桁・中ノ坪遺跡周辺は古代において駿河国富士郡に含まれ、富士郡は島田・小坂・古家・蒲原・驛家・大井・久弐・姫名・神戸郷で構成されている。

本遺跡の東側には、８～９世紀前半を時期的中心として大規模に展開する東平遺跡が位置する。東平遺跡ではこれまでの調査で300軒以上の竪穴建物跡・70棟以上の掘立柱建物跡が確認されている。広範囲に調査された東平遺跡３地区では、掘立柱建物跡と竪穴建物跡が多数検出されており、Ⅶ期の遺構変遷が認められている。Ⅰ・Ⅱ期の建物分布は調査区北部に中心があり、全域に拡がるのはⅢ期になってからである。Ⅳ期になると掘立柱建物跡と竪穴建物跡の配置は明確に区分され、掘立柱建物跡は整然と配置される。特に南北方向に直列配置された５棟は、建物東側柱筋が通り企画性が高い。Ⅴ期以降、再び掘立柱建物跡と竪穴建物跡が混在する景観を呈する変遷が考えられている。東平遺跡28地区では９×２間の身舎の西に廂が付く掘立柱建物跡が検出されている。また、東平遺跡27地区では竪穴建物跡から「布自」と記載された墨書土器が出土している。遺跡範囲内には貞観５(863)年に定額寺となった法照寺の比定地である三日市廃寺が所在し、東平遺跡16地区では多量の古代瓦が出土している。

大渕扇状地に立地する各遺跡も当該期は大きく発展したことが認められ、墨書土器・刻書土器等も出土している。しかし、蓄積された調査からは、多くの遺跡で建物構成は竪穴建物跡が卓越しており、墨書土器も８世紀代の資料は少なく９世紀代の字義不明なものが大半を占める。『扶桑略記』には延喜２(902)年に富士郡官舎が群盗に襲われ焼失した記事がみられるが、地方行政の執行機関としての富士郡家は現在まで考古資料からは充分解明されていない。

第４図　中桁・中ノ坪遺跡周辺の遺跡分布

第３節　既往の調査

第１次調査　2003年５月、富士市教育委員会により中桁・中ノ坪遺跡における本発掘調査は開始された。調査では竪穴住居跡42軒・掘立柱建物跡１棟・土坑等が検出されている。竪穴住居跡は３時期に区分され５世紀後葉～６世紀前半・７世紀・８世紀末葉～10世紀前半と捉えられ、時期的中心は９世紀後葉頃と指摘されている。

出土遺物には、須恵器・土師器・灰釉陶器のほか「七中」「二万」「主」等が記載された墨書土器や刻書土器が確認されている。

第２次調査　2006年１月より富士市教育委員会が実施した第２次調査は、大湧扇状地の扇端部で南側約250mに潤井川が位置する箇所となる。調査では竪穴住居跡が５軒検出され、６世紀後半～７世紀前葉頃の時期として位置付けられている。

これらの調査成果から、中桁・中ノ坪遺跡は地域の拠点的集落と考えられ、東平遺跡と密接な関連を有しながら９世紀後葉～10世紀頃に盛行する集落遺跡と評価された。

第１表　中桁・中ノ坪遺跡における調査一覧

遺跡調査	調査期間	調査面積	調査主体	主な時代	発行機関	発行年	報告書名
第1次調査	2003年５月～2003年10月	1,400㎡	富士市教育委員会	古墳～平安	富士市教育委員会	2004年	『中桁遺跡』
第2次調査	2006年１月～2006年２月	180㎡	富士市教育委員会	古墳	富士市教育委員会	2007年	『中桁・中ノ坪遺跡　第2地区』
第3次調査	2011年６月～2011年７月、 2011年11月～2012年２月	300㎡ 1,519㎡	静岡県埋蔵文化財センター	奈良～平安	静岡県埋蔵文化財センター	2012年	『中桁・中ノ坪遺跡』

第５図　中桁・中ノ坪遺跡の調査状況

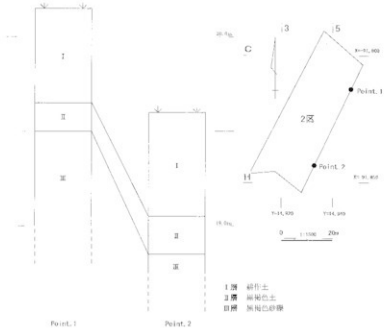
第３章　調査成果

第１節　検出遺構

１　基本層位

中桁・中ノ坪遺跡の今回の調査区は、富士山南麓に広がる大湧扇状地上に位置しており、遺跡南側には潤井川、東側には伝法沢川が流れており、これらの要因が土壌の堆積環境にも影響を及ぼしている。中桁・中ノ坪遺跡第１・２次調査は潤井川本流により近接しているため、高位に位置している今回の調

第６図　調査地の詳細



第７図　中桁・中ノ坪遺跡の基本層位

査区と整合関係が追究し難い。

中桁・中ノ坪遺跡における堆積層位を第７図に示す。Ⅰ層は耕作土である。Ⅱ層は黒褐色土であり、しまりが若干強く遺物量は少ない。

Ⅲ層は黒褐色砂礫層である。遺構検出はⅢ層上面で行ったが、遺構埋土とⅢ層を峻別することは非常に困難であった。大潟扇状地上に展開する遺跡群の多くは、今回の調査においてⅢ層に相当する砂礫層で遺構が検出されており、広域に認めることができる。Ⅲ層上面は調査区においては北側が高く、南側に向かうほど低い傾向にある。したがって、北側を高位面・南側を低位面と位置付けられる。

２　概　要

中桁・中ノ坪遺跡の推定範囲内は、宅地・水田・畑地が混在するだけでなく製紙工場も多数立地しており、少なからず土地改変の影響を受けている。本書で報告する中桁・中ノ坪遺跡の旧状は宅地・畑地であったが、１区はほぼ全面・２区は調査区西半が宅地化による撹乱が及んでいた。

検出された遺構は、竪穴建物９軒・土坑・小穴である。竪穴建物は２区南側を中心に確認できた。出土遺物から判断して、これらの竪穴建物は８～９世紀代と推定される。土坑・小穴は出土遺物が少なく時期的な中心は判然としないが、遺構の切り合い関係から竪穴建物より新しいことは明確であり、中世の出土遺物が極めて少ないことを勘案すれば10～11世紀頃に帰属するものと推定される。

なお、調査区外に及ぶ竪穴建物の存在や２区北側東壁の２箇所で竈構築材を断片的に確認できることから、中桁・中ノ坪遺跡は東側に大きく範囲が拡大する可能性を指摘できる。

３　検出遺構の詳細

SH01　Ｄ－５グリッドに位置する竪穴建物である。平面形が隅丸方形を呈すると推定されるが、建物北壁と西壁の一部を検出したのみで大半は調査区外となる。床面は掘方から５cmほど上位で検出された。

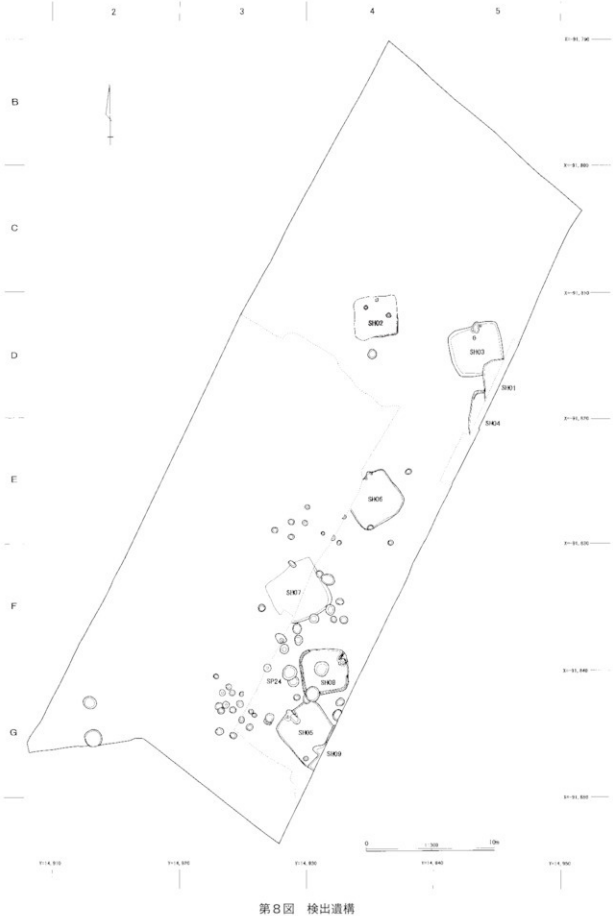
切り合い関係からＳＨ03・04→ＳＨ01の築造順序がうかがえる。

出土遺物が少なく帰属時期を明確にするのは躊躇せざるを得ないが、８世紀後葉頃と捉えておく。

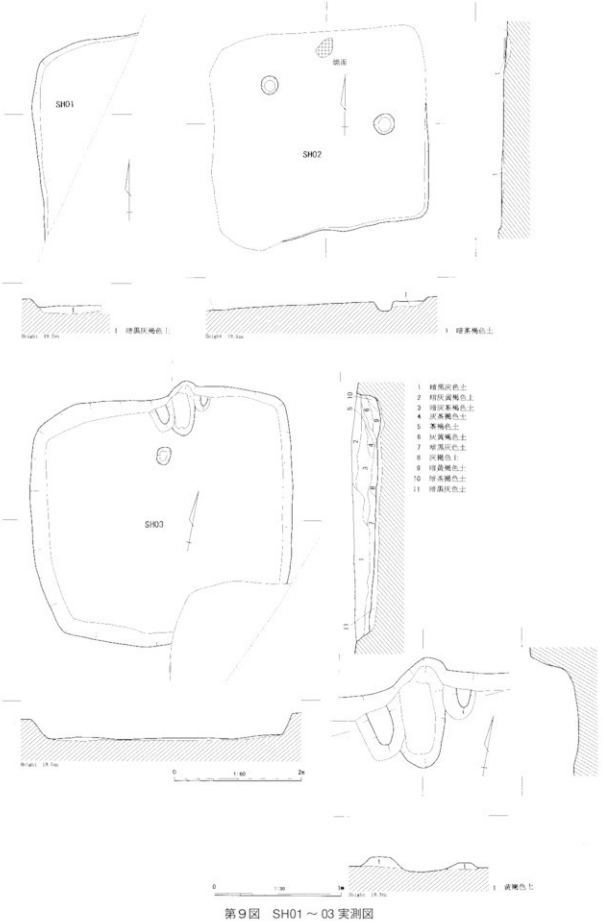
SH02　Ｄ－４グリッドに位置する竪穴建物である。検出面が削平されていたため建物西半は掘方を検出したのみであるが、南北3.2m・東西3.4mの規模である。床面上には小穴の他、北壁中央部で焼面が確認できることから、本来であれば竈が位置していたものと推定される。

出土遺物からは明確な時期の定点を見出し難いが、８世紀後葉頃と推定される。

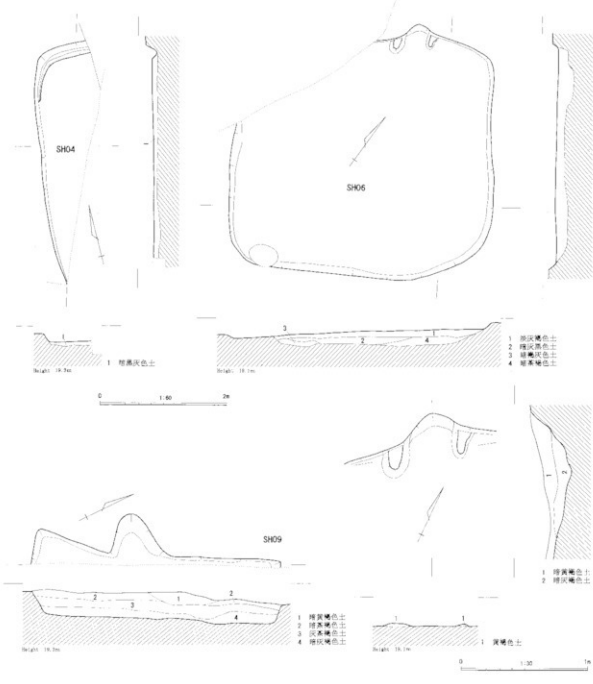
SH03　Ｄ－５グリッドに位置する一辺の長さ4.1mの隅丸方形を呈する竪穴建物である。


2
3
4
5
B
C
D
E
F
G
SH02
SH03
SH01
SH04
SH06
SH07
SP24
SH08
SH05
SH09
0
10m

第8図　検出遺構



第9図　SH01～03 実測図



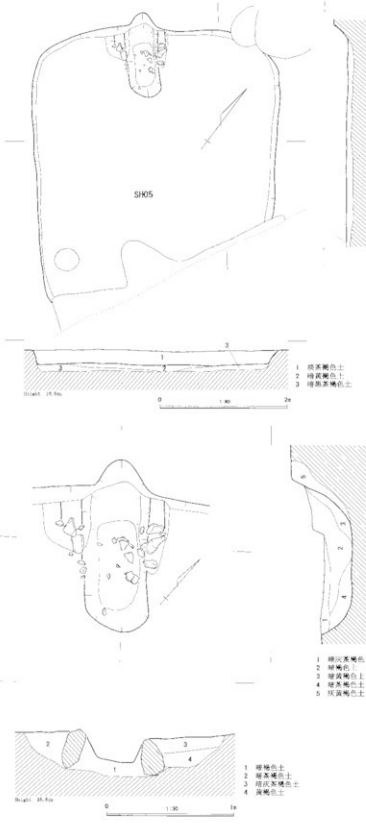
第 10 図　SH04・06・09 実測図

竈は北壁中央付近で認められるが、袖の基底部付近が検出されたのみである。主柱穴・壁溝は検出されなかったが、竈左袖部付近で小穴が確認された。

切り合い関係ではＳＨ01に切られており、出土遺物から判断して８世紀中葉頃の建物と考えたい。

SH04　Ｄ・Ｅ－５グリッドに位置しており、竪穴建物である可能性が高いが、明確に建物跡と捉えられる根拠に乏しいことなどから、遺構の性格は断定し難い。竪穴建物であれば北・西壁の一部を検出したに止まる。

床面は掘方から10cmほど上位で認められたが、主柱穴は確認されなかった。



第 11 図　SH05 実測図

時期認定に明確な定点をもちえないが、周囲の遺構状況から暫定的に時期を８世紀中葉頃と捉えておく。

SH05　Ｇ－３・４グリッドに位置する竪穴建物である。建物規模は南北4.4m・東西3.9m、平面形は長方形を意識したものと判断できる。

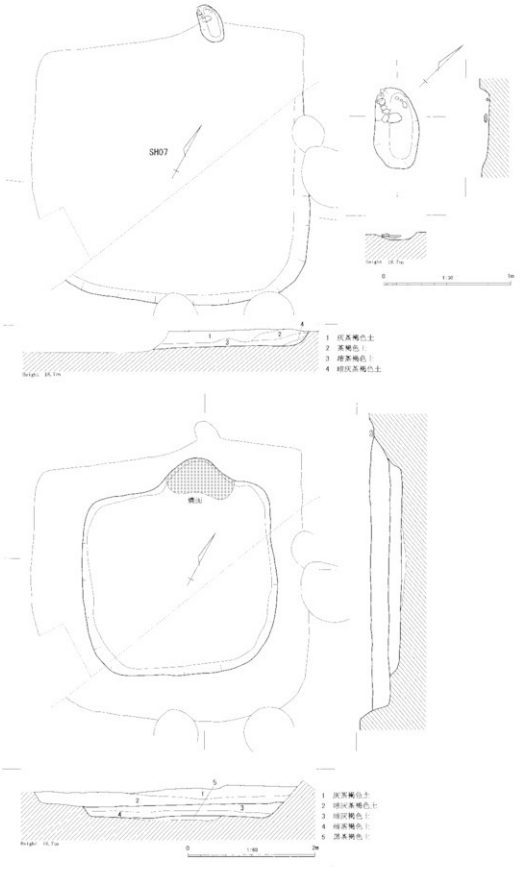
竈は北壁中央付近で検出されたが、遺存状況は良好ではない。竈は掘方を掘削した後、中央部に立位の角礫を設置し、角礫との間を粘土で充填して燃焼部を構築していた。角礫の上部には袖部が存在していたと考えられるが、断片的に基底部付近が確認されたのみである。床面は掘方から10cmほど上位で認められた。主柱穴・壁溝等は検出されなかった。

出土遺物から８世紀後葉頃の建物と捉えておく。

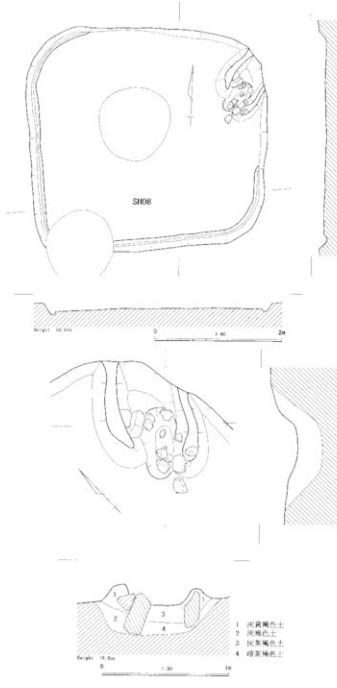
SH06　Ｅ－４グリッドに位置する竪穴建物である。建物北・西壁の一部は、撹乱により失われている。建物規模は南北3.8m・東西4.2m、平面プランはやや不整形な隅丸長方形を呈する。

竈は北壁中央部のやや東側で検出された。両袖部の基底部が部分的に遺存しているのみであり、人為的破壊の影響を受けたものと推定される。床面は掘方から20cmほど上位で認められた。主柱穴・壁溝等は検出されなかった。

建物の時期認定に明確な根拠をもちえないが、８世紀後葉頃の建物と推定される。



第12図　SH07実測図



第13図　SH08実測図

SH07　F－3・4グリッドに位置する竪穴建物である。建物北・西壁と東壁の一部は、攪乱により失われている。建物掘方から復原すると、一辺4.4mの隅丸方形を呈すると考えられる。

竈は北壁中央部のやや東側で焼土とともに掘り窪められた痕跡が検出されたため、この箇所に設置されていたものと思われる。床面は掘方から20cmほど上位で認められた。

建物掘方まで掘り下げたところ、一辺3.0mの方形プランが検出された。その形状から竪穴建物と判断でき、北側の焼面をもつ張出部は竈の痕跡とみられる。貼床が中央部周辺に部分的に確認できる。この建物掘方底面には、さらに貼床が確認できる。したがって、建物の造営・同規模で建替え・拡張して建替えが同位置で繰り返されていたことが判明した。

出土遺物から勘案して、7世紀末葉～8世紀前葉頃の建物と考えたい。

SH08　F・G－3・4グリッドに位置する竪穴建物である。建物規模は南北3.5m・東西3.7m、平面形は長方形を意識したものと判断できる。

竈は北東隅で検出されたが、遺存状況は良好ではない。竈は掘方を掘削した後、中央部に角礫を設置し、角礫との間を暗茶褐色土で充填して燃焼部を構築していた。角礫は袖部の芯材にもなると考えられ、粘土に覆われていた。床面は掘方と同一面であった。壁溝は竈部分を除いて検出されている。

出土遺物から9世紀前半頃の建物と判断される。

SH09　G－4グリッドに位置する竪穴建物であるが、建物北壁と東・西壁の一部を検出したのみで大半は調査区外となる。建物規模は南北4.0m、平面プランはやや不整形な隅丸方形と推定される。

北壁中央部西寄りに張り出し部があり、調査区東壁では焼土・粘土が観察されることから、この箇所に竈が設置されていたものと考えられる。今回の調査では僅かに煙道部が確認されたのみで、燃焼室など竈本体の大部分は調査区外に遺存すると思われる。

出土遺物に図示できる資料はない。時期認定に明確な根拠はないが、暫定的に9世紀前半頃と捉えておく。

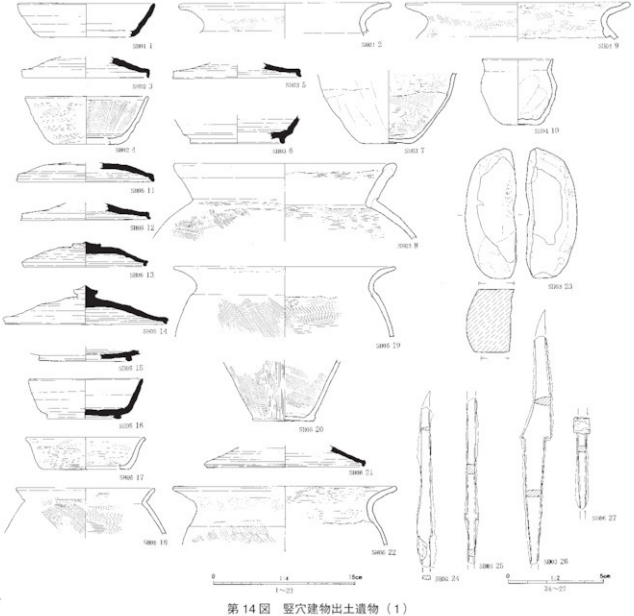
第２節　出土遺物

SH01出土遺物　１・２はSH01から出土した遺物である。１は須恵器・杯、２は口縁部が外側に引き出された土師器・甕である。

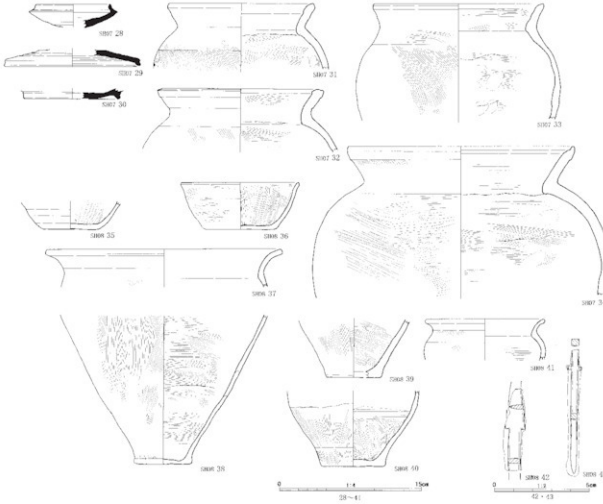
SH02出土遺物　３・４・24の遺物がSH02から出土している。３は須恵器・杯蓋、４は外面に横位の細かいヘラ磨き調整を行い、内面は放射状暗文が施される甲斐型の土師器・杯である。24は刀子と考えられる。

SH03出土遺物　５～８・23・25・26がSH03から出土した遺物である。５・６は須恵器、７・８は土師器である。５は杯蓋、６は高台を有する杯で底部からやや強く屈曲して立ち上がる。７は小型甕と考えられる。８は体部内外面にハケ調整を行い、肩部外面にヘラ磨き調整を施す駿東型球胴甕である。23は流紋岩質凝灰岩を使用した砥石である。25は鉄鏃、26は刀子である。

SH04出土遺物　９・10はSH04から出土した遺物である。９は土師器・甕、10は小型壺である。９



第 14 図　竪穴建物出土遺物（１）



第15図　竪穴建物出土遺物（2）

は口縁部が水平方向に引き出され端部は摘み上げられている。

SH05出土遺物　11～20の遺物がSH05から出土している。11～16は須恵器、17～20は土師器である。11～14は杯蓋である。頂部は口縁部付近でやや水平に近い形態となり、口縁部も短く下方に屈曲するものがある。15・16は高台を有する杯である。

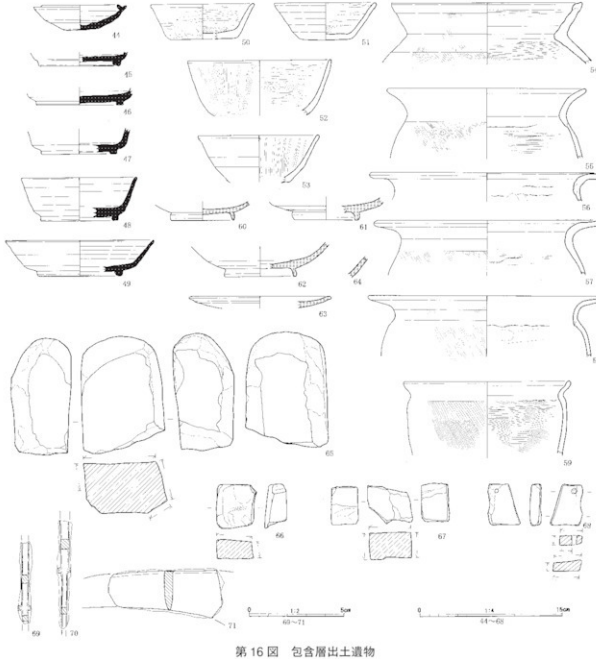
17は体部内外面に横位の細かいヘラ磨き調整を行い、底部内面には放射状暗文が施された駿東型杯である。18は口縁部が短く屈曲して立ち上がる小型甕、19の甕は口縁部が水平に近く引き出されている。20は長胴甕の底部である。

SH06出土遺物　21・22・27はSH06から出土した遺物である。21は須恵器・杯蓋、22は口縁部が外側に引き出され端部は摘み上げられた土師器・甕である。27は鉄鏃である。

SH07出土遺物　28～34がSH07から出土し、28～30は須恵器、31～34は土師器である。28～30の須恵器はSH07最終段階の床面上、31～34の土師器は拡張して建替えする段階の掘方より出土した。

28は古墳時代の杯である。SH07造営段階からの混入と推定される。29は杯蓋、30は高台を有する杯である。31～33は駿東型球胴甕であり、小型甕と考えられる。33には肩部外面にヘラ磨き調整が施されている。34は駿東型球胴甕であり、肩部から体部外面にヘラ磨き調整が密に施されている。

SH08出土遺物　35～43がSH08から出土した遺物であり、土器はすべて土師器である。36・38が竈より出土している。35・36は甲斐型杯である。36は体部内外面に横位の細かいヘラ磨き調整を行い、内



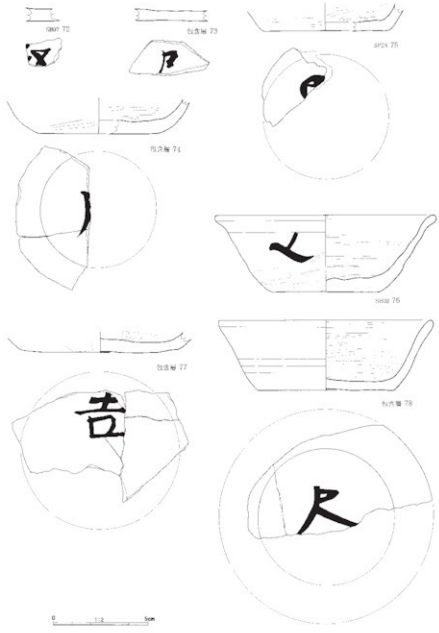
第 16 図　包含層出土遺物

面に放射状暗文が施されている。37は口縁部が外側に引き出された甕、38 ～ 40は長胴甕の底部である。41は小型壺である。42は刀子、43は鉄鏃である。

包含層出土遺物　44 ～ 71が包含層から出土した遺物である。

44 ～ 49は須恵器である。44は古墳時代の杯、45 ～ 49は高台を有する杯である。49は口径に比して器高が低い。

50 ～ 59は土師器である。50・51は駿東型杯であり、50は体部内外面に横位の細かいヘラ磨き調整を行い、底部内面には放射状暗文が施されている。52は口径に比して器高が高い器形を呈しており、体部外面には縦位・内面には横位の細かいヘラ磨き調整が施されている。53は甲斐型杯、54は駿東型球胴甕である。55の甕は口縁部がやや強く屈曲して外上方に開いている。56 ～ 58は口縁部が外側に引き出され端部は摘み上げられており、古代遠江国～駿河国西部に分布する甕との系譜がうかがえる。59は口縁部が短く屈曲して立ち上がる小型甕である。



第17図　墨書土器

60～63は灰釉陶器である。60～62は碗、63は皿である。64は緑釉陶器・碗の体部片である。

65～68は砥石である。65は凝灰質中粒砂岩を石材としている。66～68は流紋岩質凝灰岩を使用した砥石であり、68は上部に穿孔を施している。

69・70は鉄鏃、71は鉄鎌である。

墨書土器　今回の中桁・中ノ坪遺跡の発掘調査では、7点の墨書土器が出土した。7点すべて土師器であり、脚東型杯に記載されている。記載部位は1点が体部外面に記される以外は、底部外面に記載されている。

72～75はいずれも杯の底部外面に記されているが、記載内容は判然としない。76は体部外面に墨書がみられるが、判読することはできない。76は他の墨書が記された土器よりも形態として新しい様相を示している。77は「吉」、78は「尺」と判読できる。

第４章　総　括

本書で報告した調査結果は、古代富士郡にかかわる新たな情報を提供することとなった。ここでは調査内容を要約し、富士郡域における中桁・中ノ坪遺跡の歴史的評価と今後の展望を示しておきたい。

発掘調査の成果　検出された遺構は、竪穴建物９軒・土坑・小穴である。竪穴建物は８～９世紀、土坑･小穴は10～11世紀頃に帰属するものと判断される。竪穴建物は調査区外に及ぶものもあることから、中桁・中ノ坪遺跡で営まれた集落はさらに東側に拡大していることは確実である。遺物には土師器・須恵器・石製品・金属製品等が確認でき、墨書土器も７点出土している。これらの遺物には、その系譜を在来以外に求めることが可能なものが多く認められる。

集落の変遷　今回の調査で８～９世紀前半頃の竪穴建物が検出されたことにより、中桁・中ノ坪遺跡における集落変遷の概要が判明した。

集落の形成期は５世紀後葉頃であり、６～７世紀代にかけて継続的に発展した様相を示している。この時期の集落は、潤井川に近接した位置に展開している。８世紀になると前代の集落では人為的活動の痕跡を追うことが困難となり、今回の調査位置に相当する高位面に集落が出現する。８世紀末葉頃には潤井川に近接した低位面では集落が再形成され、９世紀後葉～10世紀頃に盛行する。一方、高位面ではこの時期に集落は衰微し、10世紀には廃絶している。

中桁・中ノ坪遺跡は集落の推移・土地活用において、８世紀が画期であったことを指摘できる。

東平遺跡の動態　東平遺跡では５世紀後葉頃に南東部で集落が形成され、６～７世紀に発展する。この地点は大渕扇状地扇端部であり、現在でも湧水・源流部となる低位面に立地していることに留意して

第 18 図　中桁・中ノ坪遺跡の様相

第 19 図　東平遺跡の様相

おきたい。８世紀代は高位面に集落が飛躍的に発展したことが認められるが、低位面での人為的活動は高位面と比較すると低調である。これは当範囲内に三日市廃寺が建立された影響と捉えられている。９世紀以降、高位面の集落は衰退・小規模化し、低位面は再形成される傾向を示している。

この動向を勘案すれば、東平遺跡でも８世紀が大きな画期であったと判断できる。

古代の景観　５世紀以降継続的に発展してきた集落は８世紀になり再編されるが、９世紀に継続することはなく前代までの集落へと回帰する状況が看取される。その要因を解明するのは現状では容易ではないが、これまでに蓄積された調査成果から集落の土地利用の方向性は一様ではないことを指摘できる。

東平遺跡では古墳の造営・非常に短期間ではあるが長大な掘立柱建物と計画性のある建物群の建設・寺院の建立等があり、集落域の同一地点でも頻繁に建物配置や構成に変化が認められる。これは律令制の導入が１つの契機ともみられるが、集落の盛衰により規模・機能を拡縮させた結果として捉え、中桁・中ノ坪遺跡でもその消長が土地活用に反映されたと考えたほうが理解しやすい。

さらに、両遺跡が低位面から高位面に集落の中心地を移すことを勘案すれば、自然環境の変化も集落の展開に影響を及ぼす要因とする可能性を考慮してよいだろう。

今後の展望　中桁・中ノ坪遺跡は、立地条件を変化させながら５世紀以降継続的に発展してきた。特に、断絶期と考えられてきた８世紀の集落が、今回の調査で確認されたことは特筆すべき事項である。

中桁・中ノ坪遺跡は東平遺跡と密接な関連を有していたと推察され、東平遺跡では精緻な調査により資料が蓄積されつつある。その動向を検討する上で、今回の調査成果は欠かすことができない。今後の発掘調査に期待するとともに、断片的な情報を丁寧に紡いで地域史を構築する際、今回の中桁・中ノ坪遺跡の調査成果が多方面で大いに活用されることを願う。

希白
(東平第3地区)
(中桁・中ノ坪3次 SB03・05)
盛土線 布目
(東平第27地区 SD01)
伝法沢川
東平遺跡
中桁・中ノ坪遺跡
(鉄製品)
(銅製品)
軒丸瓦
(東平第16地区)
瓦溜
(東平第16地区)
三日市廃寺跡
鉄製鏡
(東平第18地区 SH13)
瓦溜
(東平第16地区 ST21)
和田川
低 地 部
掘立柱建物
(東平第26地区 SB01)
(東平第26地区 SD01・02)
(東平第18地区 SH13)
(銅製鈴金具
(東平第15地区 SB05)
潮井川
0
1:5000
400m

第20図 8世紀の様相

参 考 文 献

【論文等】

池谷初恵　1995 「伊豆国における奈良平安時代の土器様相」『大場川遺跡群』　三島市教育委員会
木ノ内義昭　2001 「須恵器流入以降の土師器の様相」『東平遺跡』　富士市教育委員会
木ノ内義昭　2002 「須恵器流入以降～律令時代の土師器の様相」『東平遺跡』　富士市教育委員会
佐野五十三　2008 「駿河国富士郡における８世紀代の移住と集住」『静岡県考古学研究　40』　静岡県考古学会

【報告書・市町村史等】

静岡県　1990 『静岡県史　資料編２　考古二』
静岡県　1992 『静岡県史　資料編３　考古三』
富士市教育委員会　1977 『天間代山遺跡』
富士市教育委員会　1981 『東平』
富士市教育委員会　1991 『宇東川遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ地区発掘調査概報』
富士市教育委員会　1995 『沢東Ａ遺跡』
富士市教育委員会　1997 『沢東Ａ遺跡・第Ⅴ地区』
富士市教育委員会　1998 『沢東Ｂ遺跡』
富士市教育委員会　2001 『宇東川遺跡Ｌ地区』
富士市教育委員会　2001 『東平遺跡』
富士市教育委員会　2002 『東平遺跡』
富士市教育委員会　2003 『東平遺跡発掘調査報告書』
富士市教育委員会　2004 『中桁遺跡』
富士市教育委員会　2007 『中桁・中ノ坪遺跡　第２地区』
富士市教育委員会　2008 『祢宜ノ前遺跡』
富士市教育委員会　2009 『宇東川遺跡』
富士市教育委員会　2010 『東平遺跡　第15地区』
富士市教育委員会　2011 『宮添遺跡Ⅳ』
三島市教育委員会　1995 『大場川遺跡群』

【図出典】

第４図：国土地理院『1：25,000地形図「吉原」「入山瀬」』に加筆・編集
第５・18～20図：富士市『都市計画基本図』に加筆・編集

第２表　出土遺物観察表

挿図番号	番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	高台径	色調	残存率	反転	備考
14	1	SH01	須恵器	杯	(14.4)	(3.6)	(10.0)		灰白	10	○	
14	2	SH01	土師器	甕	(22.4)	(3.6)			灰黄褐	10	○	
14	3	SH02	須恵器	杯蓋	(13.2)	(2.2)			にぶい黄橙	20	○	
14	4	SH02	土師器	杯	(13.0)	5.1	(6.5)		橙	20	○	
14	5	SH03	須恵器	杯蓋	(13.6)	(1.6)			灰白	10	○	
14	6	SH03	須恵器	杯		(3.0)		(10.0)	灰	10	○	
14	7	SH03	土師器	甕		(7.6)	5.2		にぶい黄橙	20		
14	8	SH03	土師器	甕	(23.2)	(8.1)			暗赤褐色	10	○	
14	9	SH04	土師器	甕	(23.8)	(4.0)			浅黄橙	10	○	
14	10	SH04	土師器	小型壺	(7.4)	(7.0)			浅黄橙	50	○	
14	11	SH05	須恵器	杯蓋	(14.4)	(2.0)			灰白	20	○	
14	12	SH05	須恵器	杯蓋	(13.6)	(1.7)			灰白	20	○	
14	13	SH05	須恵器	杯蓋	(12.7)	(2.6)			灰	70		
14	14	SH05	須恵器	杯蓋	16.8	4.1			灰	100		
14	15	SH05	須恵器	杯		(1.2)		(9.4)	灰白	20	○	
14	16	SH05	須恵器	杯	11.8	4.3		7.8	灰白	80		
14	17	SH05	土師器	杯	(12.3)	(3.4)	(9.0)		橙	20	○	
14	18	SH05	土師器	甕	(14.6)	(4.9)			にぶい橙	10	○	
14	19	SH05	土師器	甕	(23.2)	(7.5)			にぶい橙	10	○	
14	20	SH05	土師器	甕		(6.4)	6.3		にぶい橙	10	○	
14	21	SH06	須恵器	杯蓋	(16.6)	(2.1)			灰	20	○	
14	22	SH06	土師器	甕	(23.2)	(6.3)			にぶい橙	10	○	
14	23	SH03	石製品	砥石	13.7	5.4	6.7					
14	24	SH02	鉄製品	刀子	8.4	0.8	0.2					
14	25	SH03	鉄製品	鉄鏃	8.7	0.8	0.5					
14	26	SH03	鉄製品	刀子	12.1	1.6	0.4					
14	27	SH06	鉄製品	鉄鏃	4.9	0.8	0.4					
15	28	SH07	須恵器	杯	(7.6)	(2.4)			灰黄	20	○	
15	29	SH07	須恵器	杯蓋	(14.0)	(1.7)			灰黄	10	○	
15	30	SH07	須恵器	杯		(1.1)		(10.2)	灰	10	○	
15	31	SH07	土師器	甕	(15.2)	(6.9)			明赤褐	10	○	
15	32	SH07	土師器	甕	(17.5)	(6.7)			明赤褐	10	○	
15	33	SH07	土師器	甕	(18.0)	(12.3)			明赤褐	20	○	
15	34	SH07	土師器	甕	(23.6)	(15.9)			橙	20	○	
15	35	SH08	土師器	杯		(3.0)	(5.8)		橙	20	○	
15	36	SH08	土師器	杯	(12.4)	(5.1)	(7.6)		明赤褐	30	○	
15	37	SH08	土師器	甕	(25.0)	(4.0)			にぶい褐	10	○	
15	38	SH08	土師器	甕		(15.9)	(6.1)		にぶい褐	20	○	
15	39	SH08	土師器	甕		(5.2)	(5.6)		にぶい褐	10	○	
15	40	SH08	土師器	甕		(8.0)	(6.8)		にぶい褐	40		
15	41	SH08	土師器	小型壺	(12.6)	(4.3)			灰褐	10	○	
15	42	SH08	鉄製品	刀子	4.3	1.1	0.3					
15	43	SH08	鉄製品	鉄鏃	6.6	0.8	0.4					
16	44	包含層	須恵器	杯	9.8	2.8			灰	50		
16	45	包含層	須恵器	杯		(1.5)		(8.4)	灰	10	○	
16	46	包含層	須恵器	杯		(1.9)		(9.2)	灰オリーブ	10	○	
16	47	包含層	須恵器	杯		(2.2)		(8.0)	灰白	20	○	
16	48	包含層	須恵器	杯	(12.2)	4.6		(8.0)	黄灰	20	○	
16	49	包含層	須恵器	杯	(15.6)	(3.8)		(9.0)	灰オリーブ	20	○	
16	50	包含層	土師器	杯	(11.0)	(3.7)	(7.2)		明赤褐	30	○	
16	51	包含層	土師器	杯	(10.8)	4.0	(5.6)		明赤褐	30	○	
16	52	包含層	土師器	杯	(15.0)	(5.9)			明赤褐	20	○	
16	53	包含層	土師器	杯	(12.6)	(5.0)	(6.4)		橙	20	○	
16	54	包含層	土師器	甕	(20.0)	(6.3)			褐	5	○	

挿図番号	番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	高台径	色調	残存率	反転	備考
16	55	包含層	土師器	甕	(21.0)	(7.4)			にぶい橙	10	○	
16	56	包含層	土師器	甕	(24.8)	(3.0)			にぶい橙	10	○	
16	57	包含層	土師器	甕	(23.8)	(5.8)			にぶい橙	10	○	
16	58	包含層	土師器	甕	(25.0)	(6.4)			にぶい黄橙	5	○	
16	59	包含層	土師器	甕	(17.4)	(7.8)			にぶい赤褐	15	○	
16	60	包含層	灰釉陶器	碗		(2.0)		(6.6)	褐灰	10	○	
16	61	包含層	灰釉陶器	碗	(12.0)	(2.0)		(6.6)	灰黄褐	5	○	
16	62	包含層	灰釉陶器	碗		(3.3)		(7.4)	灰白	10	○	
16	63	包含層	灰釉陶器	皿	(15.0)	(1.3)			灰白			
16	64	包含層	緑釉陶器	碗					オリーブ灰	5		
16	65	包含層	石製品	砥石	12.4	6.4	5.5					
16	66	包含層	石製品	砥石	4.7	4.2	2.3					
16	67	包含層	石製品	砥石	4.1	3.0	2.9					
16	68	包含層	石製品	砥石	4.4	3.4	1.2					
16	69	包含層	鉄製品	鉄鏃	4.4	0.7	0.5					
16	70	包含層	鉄製品	鉄鏃	5.7	0.6	0.6					
16	71	包含層	鉄製品	鉄鎌	6.0	2.6	0.5					
17	72	SH07	土師器	杯					赤褐	10		
17	73	包含層	土師器	杯					明赤褐	10		
17	74	包含層	土師器	杯		(1.8)	(6.2)		明赤褐	10	○	
17	75	SP24	土師器	杯		(1.4)	(6.6)		赤褐	10	○	
17	76	SH02	土師器	杯	(11.6)	(4.1)	(5.7)		赤褐	30	○	
17	77	包含層	土師器	杯		(1.1)	(8.4)		橙	10	○	
17	78	包含層	土師器	杯	(11.3)	3.7	(7.2)		明赤褐	30	○	

凡例

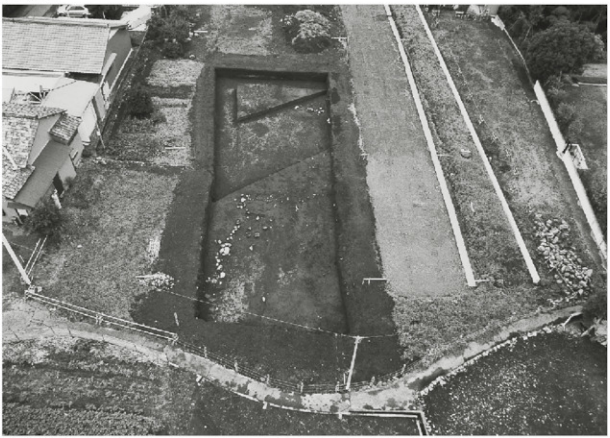
大きさの単位　：　cm
口径・底径・高台径　：　（　）は推定値
器高　：　（　）は残存値
回転体以外の大きさの表示　：　口径 - 長さ・器高 - 幅・底径 - 厚み
色調　：　『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠
残存率　：　% 表示、10% 単位で切り上げ
反転　：　○は反転して図化

図　版

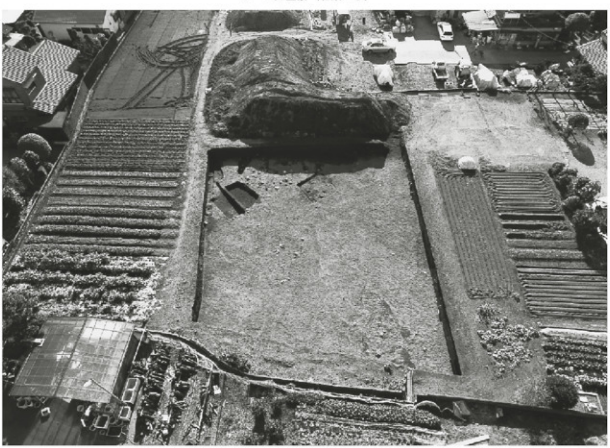
１　中桁・中ノ坪遺跡と富士山（南西から）

２　調査地区遠景（北東から）

図版２



１　１区全景（北東から）



２　２区北半全景（北東から）

１　２区南半全景（１）（北東から）

２　２区南半全景（２）（北東から）

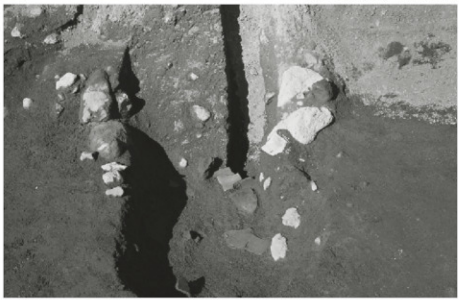
図版 4

1　SH01（南から）

2　SH02（南から）

3　SH03（南から）

1　SH05（南東から）



2　SH05　竈検出状況
（南東から）

3　SH06（南東から）

図版６

1　SH07（南東から）

2　SH08（南から）

3　SH08　竈検出状況
（南西から）

中桁・中ノ坪遺跡主要出土遺物

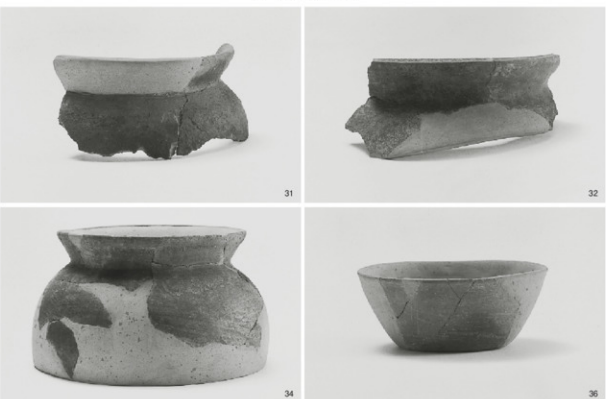
図版８

竪穴建物主要出土遺物

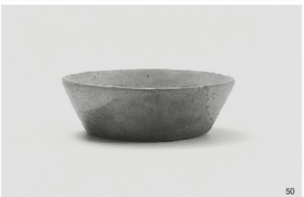
1　SH05 出土遺物（1）

2　SH05 出土遺物（2）

1　SH07 出土遺物



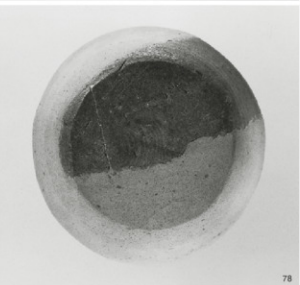
2　SH07・08 出土遺物



包含層出土遺物

図版 12

墨書土器（1）



墨書土器（2）

図版 14

1　砥　石

2　鉄製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかげた・なかのつぼいせき
書名	中桁・中ノ坪遺跡
副書名	平成 22・24 年度（都）本市場大渕線　社会資本整備総合交付金事業（街路） 工事（道路新設工）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第 24 集
編著者名	丸杉俊一郎
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23番20号　　TEL　054－262－4261(代)
発行年月日	2013 年 1 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
中桁（なかげた）・中ノ坪（なかのつぼ） 遺跡	静岡県（しずおかけん） 富士市（ふじし） 伝法（でんぽう）	22210	129	35° 17′ 20″	138° 66′ 38″	20110608 ～ 20110727	300㎡	記録保存調査 （道路建設）
						20111122 ～ 20120213	1,519㎡	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中桁・中ノ坪 遺跡	集落	奈良～平安時代	竪穴建物９軒・ 土坑・小穴	土師器・須恵器・ 鉄製品・石製品	

要　約	中桁・中ノ坪遺跡は富士山南麓の大渕扇状地（富士市伝法）に所在する。これまで２度にわたる調査で、古墳時代・平安時代の集落遺跡であると理解されてきた。 今回の調査では、奈良時代～平安時代にかけての竪穴建物が９軒検出され、土器・鉄製品・石製品が出土した。その結果、古墳時代より継続的に集落が営まれた複合集落遺跡であることが判明した。

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第 24 集

中桁・中ノ坪遺跡

平成 22・24 年度（都）本市場大渕線社会資本整備
総合交付金事業（街路）工事（道路新設工）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 25 年 1 月 31 日発行

編集・発行　静岡県埋蔵文化財センター
〒 422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田 23-20
TEL　054-262-4261（代）
FAX　054-262-4266
印　刷　所　株式会社　三創
静岡県静岡市駿河区中村町 166-1
TEL　054-282-4031